C'n

SCENE
NEWS
CHIBA CITY MUSEUM OF ART

vol.62

Topics

Interview　新館長、前館長に聞く　美術館のこれまでとこれから
蕭白ショック!! 曾我蕭白と京の画家たち
浮世絵師　溪斎英泉
所蔵作品展 モダンガール万華鏡

曾我蕭白《虎渓三笑図》千葉市美術館蔵

Interview

新館長、前館長に聞く　美術館のこれまでとこれから

千葉市美術館では、2012年3月に小林忠先生が館長を退任され、4月からは新館長として河合正朝先生をお迎えすることになりました。そこで今回は、お2人に千葉市美術館でのこれまでのこと、これからのことをお聞きしました。(2月24日、インタビュー)

—まずは、小林先生にお伺いします。平成11年に千葉市美術館館長に就任されてから13年間と、大変長く務められたわけですが、端的に、今どのようなお気持ちでしょうか？

小林　そうですね…私は東京国立博物館というミュージアムから研究者としての人生が始まって、その後大学に出たり美術館に戻ったり。84年から勤めた学習院大学は大変自由な校風だったので、千葉市美術館の２代目の館長となった時も兼職を認めてくれて。そういうことで、ミュージアムと大学と両方、私にとって大切な仕事ができるとても幸せな13年間だったんですね。美術館は社会教育の現場なので、大学ではできないことができる。大学では若い人たちに日本美術や文化の素晴らしさを伝えていける。個人としては極めて全人的な活動ができる、片一方の職場だったということですね。

—どこか寂しい、といったお気持ちもあったりしますか？

(一堂笑)

小林　…人は誰しもそうだと思うんですけど、「公(おおやけ)」の存在であると同時に「私(わたくし)」の世界を持ってますよね。公人としての活動は、大学や公立美術館である程度自分のできる範囲のことはできたかな、と。70歳で公人としては退いて、新しい仕事にこの４月から入っていくと…自分自身はまだ働けると思っているので。寂しいというより、達成感の方が大きいと思いますね。

—千葉市美術館での13年間で、特に思い出深い出来事などございますか？

小林　１つ１つ色々と思い浮かぶことはあるんですけど…。この２～3年大変充実した展観ができ、それに並行して入館者数や友の会会員数が増え、ボランティアの方々の活動など、美術館が機能していることを目に見えて受け止められるようになってきた。近年のその充実感というのは大きいと思うんですね。それは美術館が年輪を重ねて、館員の皆さんが成熟していっている。経験を積んで仕事の仕組みにも慣れ、自分たちの専門性を生かしてどうやって発信すればいいかという手応えをつかみながら、それぞれの展示が大変充実してきていると思うんです。内側から見ていて、また世間からも高い評価を頂けるようになったのは、やっぱり1つ1つの展覧会に対する取り組みの濃度が濃く深くなってきて、それが展示を見る方にも伝わるんですね。その発信力の強弱が正直に出てくるのが美術展の面白いところであり、怖いところでもあるわけで。そういう意味では学芸員の人たちが皆、流さないで競い合って良い展示を打ち出してくれている。そういう実感を得られたことが嬉しいな、と。私が引き継いだ時には「何やっても入らないよ」っていう初代館長辻惟雄先生のありがたい引き継ぎだったんですけど(笑)そんなことはない、と。辻先生に「田中一村　新たなる全貌」展(2010年)の時、館として最高の入場者数になって「ついに辻さん、私はあなたを超えたよ」って冗談で言ったんですけど、辻先生がなさった開館記念展の「喜多川歌麿展」を凌駕することができましたよね。それはやはり私にとっても美術館にとっても大きな出来事だったと思いますね。

—代わりまして、河合先生にお伺いします。河合先生は美術館の館長職は初めてということですが、就任が決まってからどのようなご心境でいらっしゃいますか？

河合　そもそも僕が大学に入って美術史やろうと思った時には、美術の現場、美術館とかそういったところで働きたいと思っていたんです。そう思いながらも、これまで美術館に勤めるということはなかったんですね。よく辻さん、小林さん、河野(元昭)さんたちと國華(こっか)社(註1)の後飲みにいくと、「美術館に勤めなきゃダメだよな」っていう話になって。小林さんだけ美術館(東京国立博物館)に関係していたから、「そうだよ、美術館にいなきゃ美術史はダメだよ」なんて。それで辻さんがこちらの初代館長になり、河野さんもついに定年退職後には秋田県立近代美術館の館長さんになったので、「あー、俺だけ館長じゃないんだなぁ」って(笑)。まぁ冗談ですけど。もちろん美術館には若い時からずっと色んな関係で関わっていたけど、やっぱり隔靴掻痒(かっかそうよう)というかね、外から中を批判的に見るってことしかなかったので。美術館で現場の仕事をしたいっていうのは一種の憧れだったもんですから。小林さんは70歳で公の仕事を退いて、これから私的な部分で活発に日本の美術を世界に伝えていこう、という目標があるんだけど、僕は同じ年で公的な部分に戻ってきちゃったような。(館長就任のニュースを聞いた)僕の学生が「先生またネクタイしなくちゃいけないんですか？」って(笑)。大学辞めてからジーンズ履いたり着物着たり、「素浪人」だって言ってたんですけど。千葉市美術館は自分の気持ちの中では非常に親しい館だったので…。

—今後の抱負をお聞かせいただけますか？

河合　これはとても荷の重い話になるんだけども、辻さんから始まって小林さんが盛り上げて今の活発な、全国的に評価されるような美術館に成長していった。その成長を止めないようにしなきゃ

いけないと思って。助走の期間からようやくトップスピードにかかろうとしているところで、おそらく僕は小林さんからバトンタッチされたと思うので、このトップスピードをさらにスピードを上げるというのも大事だけど、しばらくはこのスピードを緩めないで、さらにギアチェンジをして発展してく、多様に広がっていく、そういう手伝いができれば良いと思っているんですね。幸い優れた学芸員の人たちがいて、自分の仕事に自信を持ってきている。それを削がないようにしないといけないので、しばらくは皆さんの仕事を見ていると…。記者会見(註2)の時に、美術館は人とともに街とともに成長していく、と言ったんですけど、まさにそのことを実践できるような活動をこの美術館でサポートしていきたいと思っています。

—小林先生から、新館長としての河合先生に期待されることなどございましたら、お聞かせ下さい。

小林　河合さんは非常に人脈が広いですね、国際的にも国内的にも。そういう人脈を生かして世界的な視野で新しい美術のテーマを広げてもらえたら。それからやはり地域の美術館ですから、その地域性も十分意識されると思います。それも単に地域にこもるだけではなくて、千葉市または房総と他地域との繋がり、あるいは国際的な繋がりというものに広げていただけると良いかな、と。千葉市や房総は東京に近い先端的な都市の文化と、もう一方で歴史の古い地域、保守的な性格も根強く残っている地域と感じていますが、そこを上手く噛み合わせることも今後必要なのかな、と。地元を見ながら、世界的な広がりとか四方八方に広がる見識と人脈を持ってらっしゃると思うので…よろしくお願いします。

—河合先生いかがですか？

河合　実は僕ね、千葉市はあまり知らないんですけど、僕の母が千葉県出身なんですよ。

—え、そうなんですか！？

河合　下総中山なんだけど、小学校４年までそこで育ってるんです。そういう意味で言うと血の半分は千葉県が入ってるんだけど(笑)。記者会見でも浅草生まれ浅草育ちと紹介されたんだけど、僕は本当に浅草で育っている時間がすごく短いの。浅草に生まれたけど、戦争があって疎開をして浅草が焼かれて、千葉に行ったわけね。

小林　都会っ子でありながら千葉の県民性にもどっぷり浸かる時期があったという、河合さんのそういうところは期待されるところだと思うなぁ。

—では、最後にお2人から千葉市美術館ファンのみなさまへメッセージを…。

「寄贈・寄託作品展」会場前にて

小林　千葉市美術館は市の美術館として行政や議会からも良い支援をいただき、また地域や地域を越えた人々からも支援され、育てていただいてきたと思うんですね。そういう点では大変恵まれた環境であった。今までのことを感謝するとともに今後ともご支援のほどを官民それぞれにお願いすることしきりです。とくに２月に行われた「寄贈・寄託作品展」、これは千葉市美術館ファンの方々からのご好意がまとまった形で示せた展覧会だったと思います。今後もそういう支持者と美術館が近い距離の展示が定例化していくと良いかな、と期待しているんですけど。

河合　だいたい小林さんの話と同じで、今のような経済状態の中では所蔵品を購入していくのは難しい。そのなかで支援者が寄贈、寄託してくれるというのは非常に重要だと思うんですね。それがまた新しい支援者や街の中にいる潜在的な美術愛好家の掘り起こしになっていって、そういう人たちが美術館に来てくれて美術館は活性化していく、より成長していくところがあると思うんですね。希望としては、そういう方々が気軽にやって来られる美術館。美術館は特別展だけではないですよ、という。所蔵作品展をふらっと見に来られる、そういう美術館として進めていくこと、広報していくこと。お父さんお母さんやおじいさん、おばあさんが子供を連れてくるような美術館というのが理想かもしれない。それが大事かな、と思うんだけど。

—今年は夏に所蔵作品展「どうぶつ大行進」や、「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」もありますから、そういった機会に是非お子さんを連れてきていただきたいですね。小林先生、河合先生、どうもありがとうございました。

［聞き手：広報　磯野愛］

河合正朝略歴
1941年東京生まれ。慶應義塾大学名誉教授。専門は室町から江戸時代の絵画で、特に海北友松(かいほうゆうしょう)など近世の水墨画を中心に研究。

註1　『國華』は明治22年(1889)、岡倉天心、高橋健三らによって創刊され、世界で最も長い歴史のある月刊の日本・東洋古美術研究誌。現在も朝日新聞社より発行され、最新刊は1396號。現在の主幹(編集長)は小林忠。
註2　インタビュー当日の午前中に、千葉市長定例記者会見にて館長交代が発表された。

蕭白ショック!! 曾我蕭白と京

図1 「群仙図屏風」文化庁（作品番号53）

群仙図屏風再考―「蕭白ショック!!」展に関連して

「蕭白ショック!!　曾我蕭白と京の画家たち」は江戸時代中期の京都で活躍した個性的な画家、曾我蕭白（1730～81）の画業を振り返る展覧会です。その画業をよく知るために蕭白前史と同時代の画家たちを合わせて紹介しています。本稿では蕭白の作品で一番有名な作品と思われる「群仙図屏風」（図1、重要文化財）について図録の作品解説を補足したいと思います。

代表作、といわず一番有名な作品としたのには理由があります。蕭白の作品を1点だけ選んで掲載するときは「群仙図屏風」になることが多く、個人画集や展覧会図録の表紙などにもよく用いられます（図２）。昭和40年代初めに再発見され、ちょうど辻惟雄先生の『奇想の系譜』（1970）のもととなった雑誌連載に間にあいました。この作品の登場が『奇想の系譜』の雑誌連載（1968）の原動力の一つかもしれません。近年文化庁の所有になるまで古美術商の所有で、国立博物館に寄託されてはいたものの展覧会や出版物にご協力していただきやすい状況に長くありました。「群仙図屏風」が多分に我々の蕭白イメージを形づくっているのですが、同じような濃彩の作品は実際には意外なくらい少なく、制作時期も限られます。今回の展覧会の出品作品では他に「鷹図」（香雪美術館、作品番号51）、「美人図」（図3）、「群童遊戯図屏風」（九州国立博物館、作品番号54）、「雪山童子図」（図4）といったところ。これでも関係者の皆様のご協力を得て国内のものはかなりご出品いただいています。他には「牡丹鷹図」（白鶴美術館）があるくらいです。後はアメリカに「鷹図」（インディアナポリス美術館、タイガー・コレクション　1998年の蕭白展で展示）、「宇治川先陣争図屏風」（ファインバーグ・コレクション、2005年の蕭白展で展示、ファインバーグ・コレクションの展覧会で来日予定）がありますが、蕭白の作品全体の中で量としてはやはり少ない。そしてその中でも、六曲一双屏風の大画面に、水墨表現と合わせて密度の高い画面が展開する本作品は群を抜いていて、類作が他にありません。しかもそれに「行年三十五歳」とあって、制作年代がはっきりわかる美術史上重要な基準作ですからできすぎです。

内容は中国由来の八仙人（鐘離権、張果老、韓湘子、李鉄拐、曹国舅、呂洞賓、藍采和、何仙姑が定番、ただし異同があり、有名な仙人を含め八人いる、ということが大切。）を下敷きに福禄寿の三星や登龍門の故事を織り込んでいます。それ以外にもいろんな意味合いがありそうです。例えば左隻の右端の女性はそのルックスからいっても、桃と一緒に描かれることからいっても基本的には八仙人と縁の深い西王母です。しかし手にもっているシースルーの団扇には金で梅と月が描いてあります。「林和靖図屏風」（図5）の林和靖も手に団扇（こちらは文字が書いてある）を持って同じようなポーズをとっていました。ルックスは「群仙図屏風」左隻右端の人のほうが林和靖風です。着物の縁取りにも梅のような五弁の花があって、しかもそばには鶴もいる。この人自体は福禄寿の禄星でもあるようですが（杉原たく哉「日本・中国美術にみる夢と楽園（下）」『出光美術館館報』151、2010）、「群仙図屏風」左隻は西王母の誕生日を祝って群れ集う仙人を描きつつ、林和靖のことも思い出させるのです。他に、右隻に虎、鳳凰、龍がいて、左隻には黒い亀のような顔のついた水盤があります。青龍、朱雀、白虎、玄武の、

図２　個人画集や展覧会図録の表紙など

図３　「美人図」奈良県立美術館（作品番号52）

図４　「雪山童子図」三重・継松寺（作品番号55）

図５　「林和靖図屏風」三重県立美術館（作品番号31）

中国で天の四方をつかさどる東南西北と対応する四神とも関係がありそうです。龍が青い服の人物と、鳳凰が赤い服の人物と共にいて、虎の隣に白い鳳凰がいるのも四神の色を連想させます。

人物の配置、かたちについては、八仙人を四幅の掛軸に描くときのように二人ずつ四組の構成になっているのですが、それ以外にも工夫がみられます。例えば右隻、右から三番目の李鉄拐は直接的には青い衣の陳楠の画像が読みかえられた呂洞賓とペアですが、真横向きのかたちは左隻左端の西王母の白い衣の侍女と呼応します。右隻右端から二番目の簫史は董奉と向かいあっていますが、伴う鳳凰を含めた右に下がる三角形のかたちは左隻右端の林和靖ふうの禄星と子供たちでかたち作る三角形と対応します。相似的な人物のかたちを組み合わせて画面を構成する、鏡像関係（鏡に映った像を実像と組み合わせて人物を構成すること。参考：奥平俊六『絵は語る10　彦根屏風』、平凡社、1996）が用いられています。左隻の西王母と蝦蟇仙人は上げる手の左右が異なるものの同様のポーズですし、西王母の黄色い衣の侍女と左慈（銅盤から魚を釣り上げた）でもある寿星も手の動作は違いますが横向きに座った身体の角度と足の位置、顔の角度は相似形です。更に李鉄拐の衣も龍の皮膚も石のように描かれ、左隻では水流が木の根のように表されています。西王母の周りには中国の高級そうな工芸品の器がありますが、岩と同化しそうなものもあります。右隻には岩と木が同化している部分もあり、風と波と龍と岩とが渾然一体となり、柔らかいはずのものが硬く見え、どこまでが地面でどこからが水面なのかもよくわかりません。内容はおめでたいものですし、発色の美しい高価な絵の具をふんだんに使っていて、大名の京極家伝来ということから若君の誕生祝と予想されていますが、現実の認識を一時的に惑わせ、つくりものの世界に入りこませることが蕭白の狙いだったのかもしれません。

（学芸員　伊藤紫織）

蕭白みたいな画家

雪乃紗衣『彩雲国物語』は唐代の中国をモデルにしたと思しい架空の国、彩雲国を舞台にしています。少女向けライトノベルですが、中高年女性の人気も高く、シリーズは角川ビーンズ文庫で完結、角川文庫での刊行が始まっています。その中の『彩雲国物語　紅梅は夜に香る』に碧幽谷という画家が出てきます。

幽谷による「風の中、一本の柳の下をとぼとぼと歩く鬼女」の絵は蕭白「柳下鬼女図屏風」（東京藝術大学、作品番号26）を連想させます。「これでもかというくらい画面一杯に筆を描き込み、朱や青色を入れ、余白の美など考えもしない。調和とは無縁の、見ただけで頭がぐるぐるするような異様で気持ち悪い―しかし目を惹きつけずにはいられない壮絶な迫力―。」は「群仙図屏風」のことのように思えます。「墨の濃淡だけで月夜の山水、庵で滝を見る隠者をさらりと描き、存分に余白の美しさを活かして見る者の息を呑ませる―静謐で優しい、どこまでも遠く高く、この世の果ての深山に本当に自分が降り立ったかのような、吸い込まれそうに繊細な画」は例えば「山水図」（京都・久昌院、作品番号83）でしょうか。蕭白の作品には中国趣味が濃厚なので中華風世界の架空の絵師の作品として通用しそうです。

[関連イベント（すべて参加無料）]

■記念連続講演会(往復葉書による申込制)

「蕭白と京都画壇」
4月28日（土）14：00より（13：30開場予定）／ 11階講堂にて／定員150名
講師：小林忠（学習院大学名誉教授）　＊申込締切4月20日（金）

「蕭白―遊歴する画人」
5月12日（土）14：00より（13：30開場予定）　11階講堂にて／定員150名
講師：山口泰弘（三重大学教授）　＊申込締切5月2日（水）

【往復葉書による申込方法】
往復葉書に郵便番号、住所、電話番号、氏名、年齢、参加希望の講演会名、人数（2名まで）を明記の上、下記までお送りください。
（1通につき1講演、申込多数の場合は抽選）
〒260-8733　千葉市中央区中央3-10-8　千葉市美術館　企画係

■市民美術講座

「蕭白と蕭白前史」　講師：伊藤紫織（当館学芸員）
5月5日（土・祝）　14：00より（13：30開場）／ 11階講堂にて／先着150名

■ギャラリートーク

担当学芸員による　4月11日(水) 14：00より
ボランティアスタッフによる　会期中毎週水曜日 14：00より
＊水曜日以外の平日の14：00にも開催することがあります。

蕭白ショック!!　曾我蕭白と京の画家たち

2012年4月10日（火）▷5月20日（日）
［休館日］　5月1日（火）、5月7日（月）
［観覧料］　一般1000（800）円、大学生 700（560）円
＊小・中学生、高校生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料
＊（　）内は前売、団体20名以上、および市内にお住まいの60歳以上の方の料金
＊前売券はローソンチケット(Lコード:38675)、セブンイレブン（セブンコード:014-541）、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口(5月20日まで)にて販売
※リピーター割引をご利用ください。本展チケット(有料)の半券ご提示で、2回目以降の観覧料が半額になります。

浮世絵師 溪斎英泉

溪斎英泉「浮世風俗美女競 一泓秋水浸芙蓉」
文政(1818-30)中期 千葉市美術館(今中宏コレクション)

幕末の個性派―その実像に迫る

千葉市美術館には、幕末期の浮世絵師溪斎英泉(けいさいえんせん) (1791-1848)の作品が300点近く収蔵されています。多くは英泉の収集家で、また『英泉著畫作目録』(私家版　昭和31年刊)を著し研究家としても知られていた今中宏氏のコレクションで、昭和60年から62年にかけて千葉市が収集したものです。

実はこの英泉コレクションがきっかけの一つとなって千葉市の美術館構想も具体化したそうですので、平成7年に開館したこの美術館が、浮世絵を一つの核として展覧会を実施し、所蔵品の充実に努めて来たというのも、英泉の存在ゆえと言えるでしょう。このように千葉市美術館とは深い縁のある英泉の画業を本格的に紹介する企画展をいつか開催したいと願っていましたが、このたび満を持してそれが実現することになりました。

英泉は、文化10年(1813)頃から没する嘉永元年(1848)まで、江戸文化が最も熟成された時期に活躍した浮世絵師です。その活躍は多岐にわたりますが、特に得意とした美人画は、独特の妖艶さを示して強い存在感を放っており、文政(1818-30)中期頃には、その第一人者として認められ、多くの作品が出版されたようです。うわべの美しさだけではなく、女性の生活感や生き様に迫るような描写は、それまで浮世絵に描かれてきた可憐で端正な美人像とは大きく異なっています。時には猥雑でいびつな感覚さえ与える英泉独特の美人スタイルは、癖になるとはまってしまうような魅力があるようです。眼がつり上がり、鼻筋の通った面長で、下あごの突き出たその顔貌は、「眼(がん)を付ける」「眼を飛ばす」といった言葉が思い出されるほど、挑戦的な表情にも見えます。

強烈な印象を与える英泉の美人画ですが、一方で意外に多くの風景画を残しており、葛飾北斎や歌川広重が風景画のジャンルで人気を得る天保期(1830-44)以前から、かなり本格的に風景画に取り組んでいた様子がわかります。江戸名所を題材とした風景画が、文政期すでに相当数見いだされ、晩年には格調ある画風の名品が誕生しています。

溪斎英泉
「江戸八景 隅田の落雁」横大判錦絵 天保14-弘化3年(1843-46)頃
たばこと塩の博物館蔵

同時に名所と美人と組合わせた主題にも積極的に取り組みました。人々が江戸市中に楽しみを見いだし、行楽熱、グルメ熱が急速に高まっていた時代でもあったのでしょう。文化の爛熟を背景に発達した江戸市中の有名料理屋や、お菓子や化粧品など江戸名物を美人画の中に取り入れることで、一層浮世絵の購買欲をそそったのも英泉でした。

さらに趣味人達の求めに応じて制作した摺物、力作の多い肉筆画、相撲絵、武者絵、おもちゃ絵、版本挿絵、また絵ばかりでなく深い知識と素養を感じさせるマルチタレントぶりで文筆もよくし、その活躍域は膨大でした。加えて、今回の展覧会では、英泉が本格的に浮世絵版画に導入したと伝える舶来の化学染料プルシアン・ブルー (通称：ベロ藍)による藍摺にも注目し、科学的な検証を交えて、その実態も明らかにしていく予定です。

江戸星ヶ岡に士族の身分に生まれ、若い時に両親を亡くし、一時安房北条藩に士官したものの讒言(ざんげん)によって流浪、妹達の養育、借財や火災のため深刻な経済的苦境も経験し、一時は遊女屋もやっていたと伝えるものの、常に筆を離さず時代を生き抜いた英泉。その生き様にも大いに興味を惹かれるところです。

あまりにも多様で膨大な作品があるため、また美人画の強烈な印象が先行していたため、これまで展覧会において英泉画業の全貌が顧みられる機会はありませんでした。この展覧会では、今中コレクションを核に、主要な所蔵者のご協力も得て、選りすぐりの作品により英泉の多彩な活躍の様相に迫ります。

(学芸課長　田辺昌子)

[関連イベント(すべて参加無料)]

■ 記念講演会(往復葉書による申込制)
「英泉の美人大首絵」
6月2日(土)　14：00より(13：30開場) ／ 11階講堂にて／定員150名
講師：浅野秀剛(大和文華館館長)　＊申込締切5月23日(水)
「英泉と江戸後期の化粧事情」
6月16日(土)　14：00より(13：30開場) ／ 11階講堂にて／定員150名
講師：村田孝子(ポーラ文化研究所研究員)　＊申込締切6月6日(水)

【往復葉書による申込方法】
往復葉書に郵便番号、住所、電話番号、氏名、年齢、参加希望の講演会名、人数(2名まで)を明記の上、下記までお送りください。
(1通につき1講演、申込多数の場合は抽選)
〒260-8733　千葉市中央区中央3-10-8　千葉市美術館　英泉企画係

■ 美術館ボランティアスタッフによる多色摺ワークショップ「江戸を摺る！」
6月24日(日)　10:30-12:00、13:00-15:30 ／ 7階ミュージアムショップ手前

＊本展覧会関連の市民美術講座については8ページをご覧ください。
＊その他の関連企画については、チラシまたはホームページをご覧ください。

浮世絵師　溪斎英泉

2012年5月29日(火)▷7月8日(日)
[休館日]　第1月曜日(6月4日、7月2日)および展示替日(6月18日)
[観覧料]　一般1000(800)円、大学生 700(560)円
※(　)内は前売、団体20名様以上
※ 小・中学生、高校生、および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

モダンガール万華鏡 ―近代日本の絵画・版画から―

「浮世絵師 溪斎英泉」と同時開催される所蔵作品展は、幕末の世に新たな美人画を生みだした英泉にあやかり、近代の女性像を集めて構成いたします。名付けて「モダンガール万華鏡」。モダンガール、略してモガとは、大正期の末から昭和のはじめに現れた、尖端的なライフスタイルや装いを楽しむガールズに贈られたあだ名ですが、ここでは少々意味を広げて、近代(モダン)ならではの清新な女性像と捉えました。女絵といえば浮世絵美人を定型とした江戸期が終わり、万華鏡さながらに多様化し、表情を変えてゆく女たち―。出展作品のいくつかにふれながら、展覧会の見どころをご紹介しましょう。

まずは月岡芳年の《風俗三十二相 遊歩がしたさう 明治年間妻君之風俗》(図1)。明治20年から翌年にかけて、晩年の芳年が手がけた美人画揃物の1点です。正しく浮世絵の流れに属する作品ですが、まばゆいほどの鮮明な色彩は明治特有のもの。まだ珍しかった洋服に身を包む、良家のご夫人が描かれています。手には洋傘、頭には麦藁帽、リボンや花をひらひらさせて菖蒲の園を散歩するその表情は、実にうきうきと誇らしげ。これだけばっちり着飾れば、誰かに自慢したくもなるでしょう。ここには、女性の暮らし方が少しずつ変わり、専ら家の中にいた「奥」様も公の場に姿を見せるようになる、当時の社会状況が映しだされています。

近代の女性像と聞けば思い出される竹久夢二。その出世作となったのが、雑誌や新聞に発表したコマ絵(カット)を集めた1冊の画集、明治42年の『夢二画集 春の巻』(図2)です。その巻頭を飾った、うるんだ大きな瞳でまっすぐにこちらを見つめる少女は、元妻たまきがモデルです。彼女をミューズとして夢二が描いた甘くやるせない、かつてなく抒情的な女性像は、大衆の圧倒的な人気を得て「夢二式美人」という言葉まで生まれました。以来夢二は、親しんだ数多くの女性たちを絵にしてゆきました。彼の女絵が愛されたのは、ただ美しかったからではありません。私生活をさらし、恋人との交情を赤裸に描くという夢二の芸術家としてのあり方にも人々は熱狂し、陶酔したのです。

続いては石川寅治による鮮烈なオールヌード、《裸女十種 青春》(図3)。全裸よりも「ちらリズム」に美を感じてきた日本にあっては、明治期以降も裸体を描くことの是非自体が長く議論され、画題として定着するには時間がかかりました。本作が生まれた昭和のはじめにはさすがに浸透し、かように堂々とした、のびやかな裸婦が描かれています。しかしここでも、肉体の造型美よりはどこか不健康な、秘めやかなムードが優先されているのは、やはり日本的といえるのではないでしょうか。

そして最後に、小早川清の《赤いドレス》(図4)。断髪にパーマネント、深紅のカクテルドレスに瀟洒な長椅子、そして昭和初期に流行ったという狐の襟巻き―。まさにモガのアイテム満載、時代の肖像ともいうべき1点です。赤と黒に絞った色使いがなんともお洒落。小早川清は女絵を得意とした日本画家ですが、同時代の風俗を写すことにこだわり、自らを当代の浮世絵師になぞらえました。当時の美人画家に比して理想化を抑えた現実的な筆遣いが、女性の外見だけでなく、体温までもありありと伝えるようです。

明治中期から昭和10年頃までの、絵画と版画、書籍により構成される本展。「浮世絵師 溪斎英泉」との隔世の感に浸るもよし、意外な共通点を発見するもよし。艶然と微笑み、街を闊歩し、時に憂いに沈み、時に挑発し―。くるくると表情を変える女たちの、瑞々しい絵姿をどうぞお楽しみください。

(学芸員　西山純子)

所蔵作品展　モダンガール万華鏡―近代日本の絵画・版画から―

2012年5月29日(火)▷7月8日(日)
[休館日]　6月4日(月)、6月18日(月)、7月2日(月)
[観覧料]　一般 200(160)円、大学生 150(120)円
※(　)内は団体30名様以上
※ 千葉市内在住60歳以上または千葉県在住の65歳以上の方、小・中学生、高校生、および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料
※ 同時開催「浮世絵師 溪斎英泉」入場者は無料

図1 月岡芳年《風俗三十二相 遊歩がしたさう 明治年間妻君之風俗》明治21(1888)年

図2 『夢二画集 春の巻』より 明治42(1909)年

図3 石川寅治 《裸女十種 青春》 昭和10(1935)年

図4 小早川清《赤いドレス》 昭和初期

ボランティア日和
episode29

若い頃から絵画には興味があり、美術館や百貨店の企画展にはよく足を運んだ。どちらかといえば西洋の画家に肩入れし、日本の画家にはあまり興味がもてなかった。例外は高校時代に画集でみた浦上玉堂の《凍雲篩雪図》、横山大観の《夜桜》、川合玉堂の《彩雨》などの作品で、何故かずっと心に残っていた。本物に出会ったのはそれから十数年後のことだが、その時の感激は今でも鮮明に覚えている。特に浦上玉堂の《凍雲篩雪図》は作者の凛とした気迫が直に伝わり、しばらくその場から動けなかったほどである。自分が水墨画を学ぶようになって、なおいっそう玉堂の素晴らしさを実感している。2006年、千葉市美術館で「浦上玉堂展」が開催され憧れの作品と再会、驚きと感動で会期中何度も通ってしまった。名作と言われている作品には長い間それを大切にし、尊敬してきた人たちの想いがしみ込んでおり、それがあふれ出して我々の心を揺さぶるのだと信じている。優れた作品と人を結びつけ、感動を分かち合えるような仕事が何かできないかと考えていた時、千葉市美術館ボランティア募集の報に接し応募、幸いにも採用され、昨年4月からギャラリートーカーとして活動を始めた。先輩からトークをするなら早い方がいいと言われ、「ボストン美術館浮世絵名品展」(2011年4月-6月)で初めてギャラリートークの申し込みをした。浮世絵については教科書に出ている有名作品くらいしか知らず、とても不安だったが学芸員の田辺さんによる勉強会やトークを聞いて何とか話す内容をまとめることができた。人前に立つのは久しぶりだったので、トークデビューしたときは、言葉に詰まったり、話すべき内容を省略したりして、終了時には汗びっしょりとなった。その後何回か鑑賞教育やギャラリートークに参加したが、一般のお客様や子供達と直接触れ合うことが出来るのは、喜びであると同時に怖さも感じている。更に学習し少しでもお客様と作品の出会いを結びつける手助けが出来るよう努めたいと思っている。

［美術館ボランティア　木村由夫］

◎市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

今年度上期は右記の内容で行います。聴講は無料ですのでお気軽にご参加下さい。

［時間］14：00より（開場は30分前）
［場所］11階講堂
［定員］先着150名（入場無料）　第3回は往復葉書による申込制

【第3回市民美術講座　往復葉書による申込方法】
往復葉書に郵便番号、住所、電話番号、氏名、人数（2名まで）を明記の上、下記までお送りください。応募多数の場合は抽選となります。
＊申込締切6月20日(水)
〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8 千葉市美術館 第3回市民美術講座係

○第1回	5月5日（土）	「蕭白と蕭白前史」 ［講 師］伊藤紫織（当館学芸員）
○第2回	6月23日（土）	「藍摺の流行—英泉を中心に—」 ［講 師］田辺昌子（当館学課長）
special ●第3回	6月30日（土）	「好きな浮世絵、嫌いな浮世絵」 ［講 師］河合正朝（当館館長）
○第4回	8月11日（土）	「江戸時代の動物絵画」 ［講 師］松尾知子（当館学芸員）
○第5回	9月22日（土）	「齋藤義重の思い出」 ［講 師］藁科英也（当館学芸員）

［開館時間］
10：00 -18：00（毎週金・土曜日は20：00まで）
＊入場受付は閉館の30分前まで
［交通案内］
◎JR千葉駅東口より
○徒歩約15分
○バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩3分
○千葉都市モノレール県庁前方面行「葭川公園駅」下車徒歩5分
◎京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
◎東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く
◎地下に駐車場があります

［編集・発行］
千葉市美術館
〒 260-8733 千葉市中央区中央 3-10-8
TEL. 043-221-2311　FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan
http://www.ccma-net.jp/
［発行日］2012 年 4 月 6 日
［印　刷］株式会社恒陽社印刷所

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art